

4) チャ=茶

チャはツバキ科の常緑低木、原産地は中国及び日本で、四国や九州の暖地には稀に自生するところもある。葉は細長い楕円形で鋸歯があり表面には光沢がある。秋、葉腋に花茎 3cm ほどの白い芳香のある 5 弁花を咲かせる。果実は扁球形で完熟すると 3 裂し 3 個の種子を出す。和名の由来は漢名の『茶』を音読みしたもので、別称は『メザマシグサ』(目覚まし草)『ソウジンボク』(草人木)などである。学名は『*Thea sinensis*』で、属名は茶の漢音から、種小辞は「中国の」という意味である。茶には大きく分けて 2 系統があり、一つは小さな葉を持ち、チベットから雲南省南西部に起源を持つ中国系、もう一つは大きい葉を持ち、北ビルマに起源を持つアッサム系である。しかしアッサム系は中国系から派生したとする説もある。どの系統も温度と湿度が必要で、年平均 12.5℃、最低温度は耐寒性のある品種でも、-15℃になると数時間で枯死してしまう。降水量も大事な要件で、年間にして 1,400mm 以上が必要であり、特に 4 月から 10 月の成育期には、月間平均で 150mm の降水量が不可欠とされている。日本での茶の産地が比較的南に偏っているのはこのためである。

お茶は今から約 4000 年前、中国の本草学者が茶の解毒効果を発見し、飲用が始まったとされ、前漢末期には茶の飲用を思わせる記述がある。しかしこの頃は一般的なものではなく、薬用としてのもので、どちらかという上流階級や僧侶達のものだった。これが大衆に普及したのは随代の頃からである。しかし当時のお茶は葉を蒸してから石臼で搗いて固めたもので、団茶(ダンチャ)とか餅茶(ビンチャ)といわれるものだった。唐代の中頃になると、文人陸羽(リクウ)が現れて『茶経』(チャキョウ)を著わし、この書物は茶の栽培方法から、飲み方、効用など、当時の茶に関する全ての知識を一つにまとめたもので、いわば茶の百科事典であった。日本に飲茶の習慣が伝わったのもこの頃のこと、『遣隋使』から『遣唐使』にかけてもたらされたものと思われる。天平時代(729~749 年)には聖武天皇が百僧を招いて、大般若経を講義させたおりに『行茶』といって、文武百官に茶を賜ったという話が、平安時代の歌学書である『奥儀抄』(オウギシヨウ)に見えている。また行基(668~749 年)が諸国に 49 の学舎を建て、あわせて茶の木を植えさせたことが、1134 年に成立した『東大寺要録』の中に記述されている。一方、延暦 24 年(805 年)には、伝教大師(デンギョウダイシ)=最澄(サイチョウ)が中国から茶の種子を持ち帰り、比叡山の山麓に植えたと伝えられており、大同元年(806 年)には弘法大師(コウボウダイシ)=空海(クウカイ)が茶の種子を初め、茶を作るときに用いる石臼などの道具類を持ち帰ったといわれている。さらに菅原道真が寛平 4 年(892 年)に編纂した『類聚国史』(レイジュウコクシ)や、承和 7 年(840 年)に完成した『日本後紀』(ニホンコウキ)には、弘仁 6 年(815 年)に滋賀の韓崎(カラサキ)の『梵釈寺』(ボンシャクジ)に嵯峨天皇が行幸されたおりに、崇福寺の僧永沖(エイチュウ)が、お茶を煎じて献上したことが記されている。当時、仏経では「五戒」

として飲酒を禁じていたから、茶は酒に代わる飲み物として、もっぱら僧侶など、限られた人に飲用されるようになったのだろう。

これが次第に一般化されてくるのは12世紀以降のことで、建久2年(1191年)の僧栄西(エイサイ)が中国から茶の種子を持ち帰り、これを佐賀の背振山(セブリヤマ)に蒔いて育てたことに始まる。その後栄西は山城の梅尾(トガノオ)『高山寺』の、明恵上人(ミョウエシヨウニン)に茶の木を贈ったことが、茶の普及の発端となった。明恵は梅尾で茶の栽培を始める一方、その種子を宇治、仁和寺、般若寺、醍醐、大和、室生、伊賀の八鳥、伊勢の河合、駿河の清見、武蔵の川越にも分け与えたから、あちこちで茶の栽培が行なわれ、これと呼応するかのようになり、栄西が『喫茶養生記』(キッサヨウジヨウキ)を著わし、茶の効用を説いた。このため喫茶の習慣は急速に広まり、禅宗の普及とともにますます一般的になっていった。この時代のお茶は9世紀頃のものに比べると格段の進歩があり、現代の抹茶のようなもので風味もあり、香りもあったようだ。また明恵上人が分け与えた茶は、やがてその地の特産物となり、宇治、伊勢、駿河、狭山などは現在でも茶の産地として名高い。このように喫茶の風習はまず禅僧や上流階級から始まり、鎌倉時代の末になると茶の産地を当てる遊びも行なわれるようになり、さらに裾野を広げていった。そして室町時代になると茶の湯の形式が生まれ、足利義政が銀閣寺を建てて茶の湯を愛好したことは、茶の世界に新しい風を吹き込むこととなった。安土桃山時代には千利休が出て、茶の湯をある種の哲学にまで高め、日本人の心の世界に多大な影響を与えることとなった。このような観点で考えるとき、茶は日本人にとっては桜や椿に匹敵する、心のよりどころを提供したということも出来よう。また茶の育て方や製法も次第に進歩して、茶の芽出し時に葦簀(ヨシズ)などで覆いをし、日光を制限して育てる方法なども考案されて、これは現在でも『玉露』などの栽培には広く用いられている。

江戸時代になると葉茶に熱湯を注いで飲む、今日の煎茶の基礎ができあがり、京都黄檗山(オウバクサン)の開祖隠元(インゲン)は、この煎茶の普及に努めた。当時は今の番茶のようなものだったが、これが江戸中期、京都山城の永谷三之丞宗円が創製した『青製』は、香味と同時に清爽感を持ち合わせた煎茶で、日本人の好みにも合致し、多くの愛飲者を獲得することとなった。このブランド名は永谷園として現在も受け継がれており、「お〜い、お茶！」と相成るのである。

しかし茶が江戸時代に果たした最大の役割は、米以外の農産物を各藩に提供したことであろう。各藩は財政を立て直すためにも競って領内での茶の生産に励み、特に領内で斜面が多いところや山地を抱える藩では、これを茶園として開発することに努め、いわゆる茶年貢の徴収をはかった。茶道に傾倒した大名が独自に良質の茶園を経営したり、これが藩内に広がり当地の名産となった例もある。こうしてまず武家の間に喫茶の習慣は根を下ろし、これは間もなく町人の暮らしの中にも浸透して

いった。しかし一方では喫茶そのものが奢侈の一つとして禁止されるようになり、庶民の手に届くのは19世紀になってからのこととなったのである。

お茶の成分にはカフェインや、タンニン、アミノ酸などが程よく含まれ、独特の風味を醸し出している。カフェインは玉露や抹茶などに多く含まれ、神経を興奮させ、血液の循環を良くする働きがある。タンニンは渋味のもとであり、品種や製法、摘菜の時期などにより異なり、夏場に摘んだ茶には特に多く含まれている。またアミノ酸は茶のうまみに関係があり、やや甘味が感じられるのもこのアミノ酸のためである。五月の最初の新芽でつくる一番茶には特に多くのアミノ酸が含まれ、遮光して作る玉露や抹茶には普通の煎茶などよりも多くのアミノ酸が含まれている。このほかにも香りのもとともいえる精油がいくらか含まれており、これは茶の味わいとして欠かすことのできない成分となっている。

茶はその製法によりいくつかの種類がある。日本で作られているのはほとんどが不発酵茶の緑茶で、中国では半発酵茶のウーロン茶、西洋では発酵茶の紅茶である。不発酵茶は最初の段階で蒸気をあてて酵素の働きを押さえ、酸化しないようにしたもので緑色を保つ特徴がある。これに対して発酵茶は芽葉を萎びさせてよく揉み、十分に酸化させたものである。半発酵茶はこの中間的なもので、摘んだ芽葉を陰干しにしたり日光にさらして萎びさせ、成分の一部を発酵させるものである。

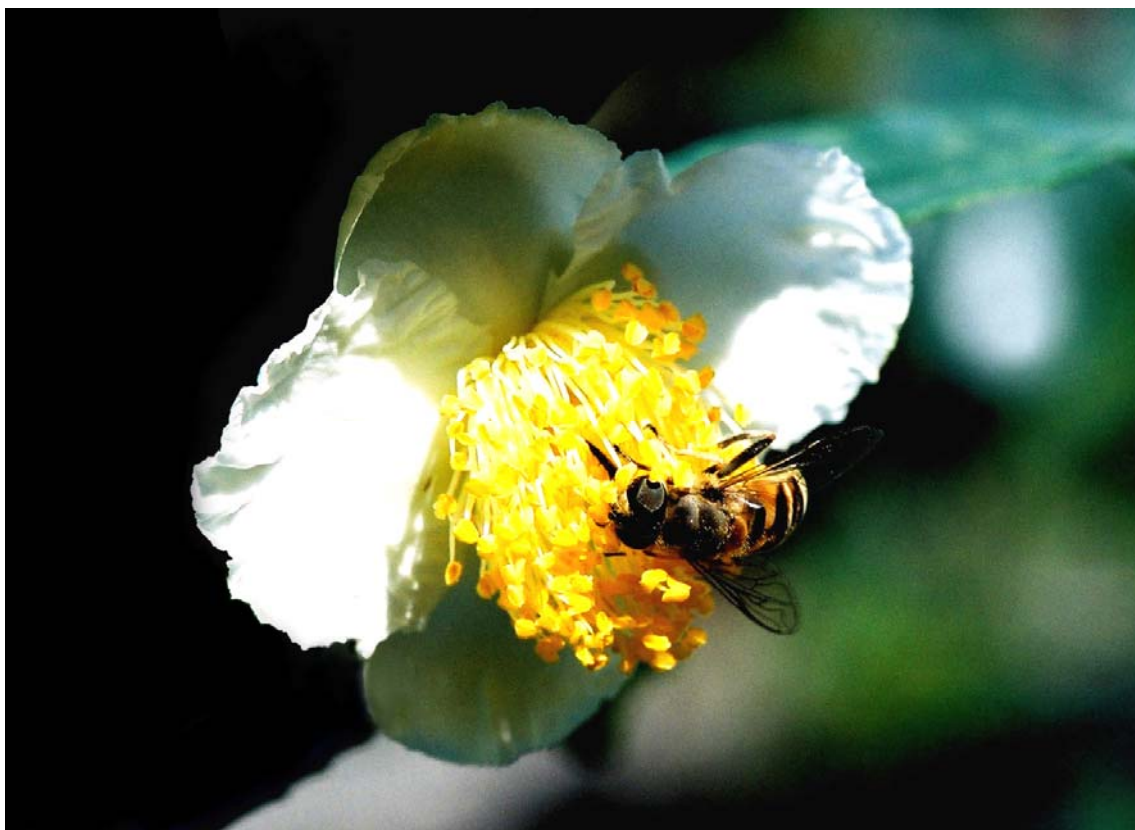
ヨーロッパに茶が伝わったのは1516年のことで、ポルトガル人がマカオにやっ来て、中国との交易を始めてからである。やがてヨーロッパでの勢力関係の盛衰により、これにとって変わったのがオランダで、1610年にオランダの東インド会社は、マカオや日本の平戸で盛んに茶を仕入れ、これをヨーロッパにもたらして、多大な利益を上げた。1657年に茶はイギリスにも伝わって、急速に人気が高まり、やがてイギリス人自身が、胡椒や絹織物などとともに茶を求めて、世界の海に進出するようになった。このため当時の先進国であったスペインとポルトガルの同君連合とオランダ、イギリスの間で制海権を巡って激しい戦いが繰り返され、まずイギリスは1588年にネルソン提督率いる海軍が、スペインの無敵艦隊を撃破し、1600年にはロンドンに東インド会社を設立、1652年にはオランダとの間で、数次にわたる英蘭戦争を起こし、制海権を握ることとなった。更に1689～1697年には、新大陸でも英仏の間で植民地戦争が勃発し、やがて新大陸においてもイギリスはフランス、オランダ、スペインの勢力を駆逐して、世界の海を独占するまでになった。イギリスはオランダに代わって中国茶を輸入するだけでなく、中国の政情不安が深刻になると、インドのスリランカなどで、自力で茶の生産に携わるようになる。

一方、新大陸アメリカに茶が伝わったのは17世紀のことである。1750年頃になると茶の消費量は著しく増加、イギリスはこれに目を付けて、茶の輸入にあたって高い『茶税』を課して大きな利益を確保しようとした。この頃になると東インド会社は

経営難に陥り、この危機を克服するために、北米植民地での茶の独占販売権を得て、経営の改善を図ろうとしたのである。これに対して植民地側は、重商主義体制の強化と捉えて猛烈に反発し、主要な港での茶の陸揚げを阻止して、1773年12月16日夜にはボストン港で、最初の実力行使を行なった。これが歴史に名高い『ボストン茶会事件』で、この事件はやがてアメリカの独立を促すきっかけとなった。イギリス本国政府はこの事件を反逆と見なして、翌年の三月には『ボストン港閉鎖条令』を初めとする懲罰諸法を制定して報復した。しかしこの措置はむしろ逆効果で、植民地指導者の間で芽生えていた自治意識を一気に高める結果となり、1775年にはついに『独立戦争』が勃発した。当初、植民地指導者達は大陸会議を開いて相互の結束を固めつつ、和解の機会をうかがったが、本国政府により拒否されると、世論はたちまち自由と独立の方向に走りだし、生命、自由、幸福の追求を高らかにうたい上げた『独立宣言』が発表され、本国との間で戦争状態に突入した。植民地軍は当初不利な戦いを強いられたが、サラトガでの戦いの勝利後、フランス軍からの支援を受けることにも成功し、ヨークタウンの戦いで勝利を不動のものにした。そして1783年にはパリの平和条約で独立が承認され、アメリカ合衆国が誕生したのである。しかしここで見落とすことができないのは、フランスからの支援を受けたとはいえ、アメリカの経済力がイギリスと対等に戦えるほど成長していたことである。確かにイギリスにとっては、極めて長い平站線を維持しなくてはならず、不利な戦いではあったが、世界最強の海軍を誇ったイギリス軍を、義勇軍を中心とする植民地軍が破ったことは歴史上特筆すべきことで、戦闘的な勝利もさることながら、自由と平等の理想を掲げて新大陸に渡ったピューリタンの精神的バックボーンの勝利と見ることも出来よう(04-03-03-2 綿の項参照)。

話は横道にそれたが、ともかく茶は世界のどこの国においても必需品となったのである。また紅茶の需要は緑茶のほぼ4倍にあたり、中でもイギリスにおける消費が特に多く、次いでアメリカ、ポーランド、カナダなどの順である。一方緑茶の消費は中国、日本、北アフリカ、中近東諸国などが主な消費国である。また一人あたりの消費が多い国は、イギリス、ニュージーランド、オーストラリア、トルコなどで日本の倍以上になる。英国文化圏の国々の消費が特に多いところに、茶をめぐる長い歴史が潜んでいるともいえよう。一方、生産の方は最も多いのが中国で、次いでインド、スリランカ、インドネシア、日本などの順になっている。しかし最近ではアフリカや南アメリカなどでも、盛んに栽培されている。

茶を含んだ言葉は極めて多い。「番茶も出花」を初め「茶々を入れる」「お茶を濁す」「茶屋遊び」「茶番劇」「茶坊主」「茶の間」「茶懐石」「茶箆筒」「茶漬け」「茶羽織」「茶話会」「お茶目」「茶柱」「茶棚」「茶腹」「茶話」「茶店」「茶飯」「茶碗」「茶代」…きりがいいからこの辺でやめとこ。佐賀県の嬉野には嬉野の大茶ノ木といわれる茶の巨木があり樹齢300年を超えるといわれ、国の天然記念物に指定されている。



茶の花が改良されてサザンカになったという。漢字で山茶花と書くのはこのためである(埼玉県狭山市)。



紅花チャ。これでお茶の葉を取るわけではなく、もっぱら観賞用である(園芸品)。



一面の茶畑。ポールの先端には扇風機が設置され、晩霜の恐れのあるときには、空気を攪拌して、新芽が吹いた茶葉付近の温度が下がらないように調節する(埼玉県狭山市)。



1990年代の茶摘み風景、現在では機械で摘んでいる(埼玉県所沢市)。

[目次に戻る](#)